

事業名称	京都・大学ミュージアム連携を核とする京都文化の新たな発掘とその国際的発信プロジェクト		
実行委員会	京都・大学ミュージアム連携運営委員会		
中核館	京都工芸繊維大学美術工芸資料館		
	住所	〒606-8585 京都府京都市左京区松ヶ崎橋上町	
	TEL	075-724-7924	FAX 075-724-7920
	ホームページ	http://www.museum.kit.ac.jp	
構成団体	大谷大学博物館、京都外国語大学国際文化資料館、京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム、嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学附属博物館、京都産業大学ギャラリー、京都市立芸術大学芸術資料館、京都精華大学情報館・ギャラリーフローラ、京都造形芸術大学芸術館、京都大学総合博物館、同志社大学歴史資料館、佛教大学宗教文化ミュージアム、立命館大学国際平和ミュージアム、龍谷大学龍谷ミュージアム		
事業開始時点の課題分析	<p>京都・大学ミュージアム連携（以下「連携」）は2011年度以来、京都（2回）・博多・東北・沖縄における合同展覧会とシンポジウム、スタンプラリーなどの事業を展開してきた。これらの活動が評価され、ICOM ミラノ大会で事例報告され、2015年にはUMAC 委員長の視察を受け入れ、2017年度には台湾の国立台北教育大学において台湾の大学ミュージアムとの交流シンポジウムを共催するに至っている。また、美術史学会、博物科学会、全国大学博物館学協議会など国内諸学会でもその活動は報告されている。「連携」では、2019年のICOM 京都大会、2020年の東京オリンピックに向けて、京都文化を国内外に発信するプラットフォームとなるとともに、海外の大学ミュージアムとの交流により、グローバルな文化発信を活動の基本方針としたい。</p> <p>京都文化は世界的に注目されているにもかかわらず、古都という一面が強調されるだけで、とくに近代以降の文化遺産については十分な発掘と発信がなされているとはいえない。「連携」では、大学の教育・研究の成果として蓄積されている歴史・考古・美術工芸資料類を積極的に展示に活用して、それを地域文化の新たな発信と位置付けて地域に還元するほか、ひろく国際的にも発信すべきであると考えている。また、ミュージアムというかたちでそれらを公開することのできない大学にあっても、貴重な資料類が収蔵されていることはいうまでもない。そのような大学の知的財産も公開する方向を模索すべきである。さらに、大学は学芸員養成に対して社会的責務を担っているが、国際的な学芸員の養成については、実効性をともなっていないのが実状である。その理由は、教員そのものが海外における美術館・博物館のあり方を十分に理解していない点にある。このような現状の課題を解決し、京都文化の新しい側面を呈示する必要がある。</p>		
事業目的	<p>「連携」はふたつの文化的ハブとなる。ひとつは、「連携」加盟館とミュージアムをもたない大学、および他の機関（京都府立京都学・歴史館（旧京都府立総合資料館）、（株）便利堂など）との空間的なハブであり、他は、研究、教育を通して過去の産物（考古、美術工芸、宗教遺物など）と現代社会とを結ぶ時間的なハブである。「連携」のこの機能を2018年度はより強化することを目的として設定した。</p> <p>大学ミュージアムは、それぞれに個性的な収蔵品をもち、相互に独立性が高い。「連携」はそのような独立性を尊重しつつも、「教材としての収蔵資料の研究と活用」「地域の文化財の発掘と発信」「連携事業の国際的展開」などの問題意識を共有している。「連携」では、歴史、考古、美術、教育、宗教、外国語などそれぞれのミュージアムの個性と特性をいかすかたちで、複数の館が共同して事業を推進することにより、多様で多彩な地域文化の継続的発信とそのグローバル展開を目指している。</p> <p>2018年度は、地域文化の発掘・発信事業を継続するとともに、海外の大学ミュージアムとの交流を深めて、文化庁が2019年、2020年に向けて構築することを目指している地域の文化発信とそのグローバル展開のモデルとなることを目的とした。さらに、ミュージアムをもたない大学が収蔵する貴重な資料類をも社会に呈示するシステムを確立するための基礎作業をおこない、次年度以降に展開するさらなる京都の大学収蔵品の公開へと繋げ、それを地域へと還元してゆきたい。</p>		
事業概要	<p>2018年度の具体的な事業は、おおきく二つに分かれる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 京都文化および「連携」活動の国際的発信では、2018年9月に開催されるICOMの舞鶴ミーティングに合わせて、UMACの関係者および台湾側スタッフを京都に招聘し、「連携」加盟大学、京都におけるミュージアムをもたない大学のスタッフ、学芸員資格担当者を交えたイベントおよび国際シンポジウム「大学ミュージアムの活動とその意義」の開催（①）。 2. 京都文化の新たな発掘では、以下の三つの展覧会を開催する。 <p>昨年度に引き続き近代京都の図案についての展覧会「掌のなかの図案—近代京都と図案教育 I I 展」を、京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学の共催で開催（②）。なお、この展覧会については、京都府立・京都学歴史館および展示施設をもたない京都美術工芸大学の協力を得た。嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学附属博物館と立命館大学国際平和ミュージアムが共同で、地域の資料の掘り起こしの一環として「外山重男：ある兵士の日常Ⅱ」展を共同で開催（③）。嵯峨美術大学と佛教大学が共同で、これまで継続的に実施してきた京都の大念仏狂言の調査・発信事業を拡充・継続し、映像記録を中心に「千本ゑんま堂大念仏狂言」展を開催（④）。</p>		

<p>実施項目</p> <p>・</p> <p>実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携 □イ ユニークベニューの促進 ■ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館 ■エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信 <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> □ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成 ■イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発 □ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施 □エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業 <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動 □イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発
<p>施後の 成果・効果等</p>	<p>国際シンポジウム「大学ミュージアムの活動とその意義」・イベント(①)においては、ICOMのSuay Aksoy会長、UMACのMarta C. Lourenço委員長をはじめ、台湾の国立台北教育大学林曼麗教授、国立成功大学陳政宏博物館館長、国立台北芸術大学黄貞燕助理教授など国内外から16名の関係者を招き、京都・大学ミュージアム連携加盟大学関係者と、大学ミュージアムの現状、方向性などについて有意義な議論をすることができた。当日は台風の直撃を受けて当初予定していた一般への公開はできなかったが、当該会議には、京都・大学ミュージアム連携所属館の学芸スタッフや展示施設を有しない京都橘女子大学の教員なども参加しており、国際的な見地からの大学ミュージアムについての議論を広く共有することができた。議論の成果は報告書にまとめることができた。(新聞取材2件)。</p> <p>京都文化の新たな発掘では、昨年度に引き続き近代京都の図案についての展覧会「掌のなかの図案－近代京都と染織図案Ⅱ」(②、入場者1,740名、新聞展評1件)を、京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学の共催で開催した。この展覧会の開催により、京都市内在住のもと高島屋所属デザイナー及び縮緬製作会社からあらたに資料の寄贈を受けることができ、京都文化の発掘に寄与することができた。新聞評でも「多様な図案集の姿が見えてきた」(大阪日日新聞)と記された。嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学附属博物館と立命館大学国際平和ミュージアムが開催した「外山重男：ある兵士の日常Ⅱ」展(③、入場者2712名、新聞取材3件、ラジオ中継1件)においても継続的に出征兵士関係の資料・情報を収集し展示公開した。アンケートでは「戦争の大変さや悲しさを伝えたい、分かってもらいたいという苦しい気持ちもあったらうと思いましたが、それでも家族に手紙を送り兵士の方が気づかっておられることが心に染み込みました。日常の風景や子供の成長など幸せを、手紙を送ることで家族と共有し、戦争の中を必死に生きようとしていたのではと思いました。人間味の溢れる手紙の中には、戦争の惨禍や残虐さが伝わってきて、戦争の悲しさや不条理が感じられました。戦争の歴史や事実、加害・被害といった問題だけでなく、兵士の心情など文化的な側面にも目を向け、幅広い視野を持って戦争や平和を考えていかなければならないと改めて思わされた展示でした。」(学生)というような回答があり展覧会の主旨が浸透していることがわかる。嵯峨美術大学・佛教大学の「千本ゑんま堂大念仏狂言展」(④、入場者357名、新聞取材1件、テレビ中継2件)では、映像記録を作成して面などととも展示した。また、ワークショップを実施した。ワークショップの実施により伝統文化である念仏狂言の理解を深めることができた。アンケートにより、9割を超える回答者が展覧会の構成を「良かった」と感じていることがわかった。アンケートにより、9割を超える回答者が展覧会の構成を「良かった」と感じていることがわかった。</p> <p>以上のように、京都文化の新たな発掘は大きな成果をあげている。</p>

【事業実績】

本事業では、①国際シンポジウム「大学ミュージアムの活動とその意義」・プレイベントによる事業の国際的発信、および、②「掌のなかの図案—近代京都と染織図案Ⅱ」、③「外山重男：ある兵士の日常Ⅱ」展、④「千本ゑんま堂大念仏狂言展」により地域文化、地域資料の発掘・発信をおこなった。

① 国際シンポジウム「大学ミュージアムの活動とその意義」・プレイベント 2018年9月29日・30日

会場：プレイベント TKP 京都四条烏丸カンファレンスセンターカンファレンスルーム 2A

見学：京都産業大学ギャラリー、龍谷大学龍谷ミュージアム

国際シンポジウム 同志社大学明德館M1教室（台風直撃のためホテルユニゾ京都四条烏丸に変更）

シンポジウム当日は台風の直撃を受けて当初予定していた一般への公開はできなかったが、プレイベント、シンポジウムともに、京都・大学ミュージアム連携所属館の学芸スタッフや展示施設を有しない京都橘女子大学の教員なども参加しており、国際的な見地から、大学ミュージアムの現状、方向性などについて有意義な議論をすることができた。



② 「掌のなかの図案—近代京都と染織図案Ⅱ」展

会場：京都工芸繊維大学美術工芸資料館 会期：2018年10月1日～10月27日

明治時代から大正時代にかけて、京都で刊行された図案集をとりあげた展覧会で、京都市立芸術大学のほか、京都府立・京都歴史館、高島屋史料館、立命館大学からも多くの出品を得て展示を構成した。この展覧会を契機として、図案関係資料のあらたな寄贈申し込みがあり、地域文化の発掘に貢献した。



③ 「外山重男：ある兵士の日常Ⅱ」展

会場：立命館大学国際平和ミュージアム2階 ミニ企画展示室 会期：2018年7月14日～8月26日

昨年度に続く軍事郵便はがきの展示。学生からも「戦争の大変さや悲しさを伝えたい、分かってもらいたいという苦しい気持ちもあったらと思うのですが、それでも家族に手紙を送り兵士の方が気づかっておられることが心に染みました。（中略）人間味の溢れる手紙の中には、戦争の惨禍や残虐さが伝わってきて、戦争の悲しさや不条理が感じられました。戦争の歴史や事実、加害・被害といった問題だけでなく、兵士の心情など文化的な側面にも目を向け、幅広い視野を持って戦争や平和を考えていかなければならないと改めて思わされた展示でした。」「実際に戦地に行かれた時の絵ということで、当時の様子がとても想像しやすい展示だったと思います。複製はがきを手にとって読むことができるという展示方法は、展示を身近に感じることができて素晴らしいと思いました。（後略）」などの反響があり、地域文化の発掘と発信が平和教育に有効に役立っていることがわかる。



④「千本ゑんま堂大念仏狂言」展

会場：嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学附属博物館 会期：2019年2月17日～3月17日

嵯峨美術大学と佛教大学がこれまで継続的に実施してきた京都の大念仏狂言の調査・発信事業を拡大・継続するもので、今年度は「千本ゑんま堂大念仏狂言」について、実物資料にくわえて映像資料による記録を作成し、展示を構成した。また、会期中の3月3日には千本ゑんま堂会館において、千本ゑんま堂大念仏保存会、嵯峨大念仏狂言保存会によるワークショップを実施した。「貴重な体験ができた」「狂言の話の展開もよくわかった」「稽古の様子の写真があったのでより身近に感じることができた」などの感想が得られた。

